九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「こつ」の教育的考察

高田，熱美
九州大学医療技術短期大学部診療放射線技術学科

https://doi.org/10.15017/193

出版情報：九州大学医療技術短期大学部紀要. 16, pp.63-69, 1989-03-03. 九州大学医療技術短期大学部
バージョン：
権利関係：

「こつ」の教育的考察

高 田 熱 美*

An Educational Inquiry concerning 'Knack'

Atsumi Takada

はじめに

Alfred North Whitehead は彼の教育論のなかでくりかえし 'art' という言葉を使っていた。たとえば下記の如くである。

In the teaching of science, the art of thought should be taught : namely, the art of forming clear conceptions applying to first-hand experience, the art of divining the general truths which apply, the art of testing divinations, and the art of utilising general truths by reasoning to more particular cases of some peculiar importance.(1)

The art of education is never easy.(2)

'art' にはどういう訳語を当てるべきであろうか。方法と訳してあるものもある。(3) つまり「思考の方法」「教育の方法」のようにである。もっとも方法は 'way' や 'method' の方に近いように思われるのであるが。

本来、方は呪術的な境界を、法は刑を示すものであったという。(4) したがって、方は排除するという意味をもち、法は支配の法術から技術的な処法の意味へと展開するのである。それゆえ、方法は外にある対象へ向かって作用することを含んでいる。方式、方向、技法、書法などが示す如く、これらはいずれも外へ向かって何ごとかを現すことを意図する。その点では方法という用語は明瞭にして堅固な印象を与える。それは 'clear' にして 'hard' というべきか。であれば、ここでは、'art' に方法を当てるのは十分ではないように思われる。

'art' は曖昧で柔軟であるといった印象が強い。それは方法というより業、巧、芸、術といったものに近い。したがって、'the art of education' とは教育の業、巧、芸、術とした方が望ましいであろう。ともかく、教育するとは、方法化することが容易ではない全人間的な活動であるので、教育の方法以上の何かが 'art' には与えられねばならないであろう。

ところで、'art' に「こつ」という訳語を当てている場合もある。(5) 'the art of education' とは「教育のこつ」と訳されているのだ。想えば、「こつ」は「方法」に取って代られ、今や教育の用語としては忘れかけられている言葉である。にもかかわらず、「教育のこつ」「思考のこつ」という訳は独特の含蓄をもって響いてくる。それはいずこに由来するのか。「こつ」とは何であるのか。'art' の訳語を求めているうちに、ゆくりなくも「こつ」という言葉に行き当たった。実は、この小論は 'art' ではなく、「こつ」を解読して、教育の本質にふれようとするひとつの試みなのである。

* 九州大学医療技術短期大学部一般教養

I．意　　味

「こつ」とは「骨」である。漢語においては、それは、「ほね」「がら」であり、また「なりふり」つまり人の「品格」をいう。さらに、するどくとがっていることから書体のするどく力強いことを指す。したがって、おもむき、いきおい、意気を示すことになる。骨梗、骨気などはその例である。[6] それゆえ、骨は人格ないし心意的要素を含んでいる。

骨は邦語においてはいかなるものか。これには、いわゆる骨の他に学芸、技能にひいでた天分を指す。たとえば「（定家ノ歌ハ）そのこつすぐれざらむ初心の者まねはば正体なき事になりぬべし」[7]（後鳥羽院口伝）

世阿弥はその著「至花道」において骨を語っている。[8]

「この芸能に、皮・肉・骨あり。」「そもそも、この芸能に、皮・肉・骨の在所を指さば、まづ、下地の生得ありて、おのづから上手に出生したる瑞力の見所を、骨とや申すべき。」「また、見・聞・心の三つにとらば見は皮、聞は肉、心は骨なるべきやらん。また、音曲ばかりの内にも、この三つはあるべし。声は皮、曲は肉、息は骨。」「さて後心にも案見する時、何と見るも弱き所のなきは骨風の芸劫の感……」

世阿弥が語る「骨」は彼独自の芸術観によるものであって、それがそのまま一般化されるわけではない。しかし、そうであるとしても、「骨」に世阿弥が込める深甚な意味は、「骨」がそれだけの包容力をもった言葉であるということを示してもいる。

世阿弥は「骨」をして生来の素質ないし力が芸に現れる場を想定せしめる。すなわち「骨がある」とはみどころ（見所）、可能性があるということなのだ。見所とはしん（心）にしてそく（息）である。

世阿弥によれば、骨・肉・皮の三つを「持っている」だけでは十分ではない。真の芸者とは三つの「揃った」つまり「統合した」者でなければならない。このためには三つのそれぞれにおいて、芸をことごとく究め尽くすことである。したがって、骨においては骨風の芸の修行を究めるのである。骨もまた修行において完成されるというのだ。世阿弥においては「こつ」は形而上学的境位にまで高められているというべきか。

現代においても「こつ」は多様な意味を見せている。こつは、いわゆる「骨」の外に要点を示すことがある。骨髄、骨子、真骨頂などがそうである。「こつ」は人がら、気だてである。風骨、気骨、奇骨、侠骨、凡骨という。さらに「こつ」は要領、微妙なやり方の呼吸、ぐあい、調子を指す。骨法、骨をのみこむ、骨がわかる、などがそうである。

邦語のこつに相当するものは何であろうか。周知のように 'art' は芸術、美術、技法、術、技能、要領、学問、学芸、人為、技巧、作為、術策などの意味をもつ。この点では 'ars' も同様である。すなわち、それは（論証の）術、才能、熟練（よい、わるい）性質、特性、志向、主義、道、手段、方法、技巧、策略、職、美術、芸術、学芸、学術、学、知識、原理、法則、学術書、芸術品などである。ただ 'art' より 'ars' の方が幾分人間の特質に対する価値的色彩があるともいえる。たとえば（よい、わるい）性質、才能など。

「こつ」は、こう見てくると 'art' ないし 'ars' に似通っているようでもある。それだからこそ 'art' を「こつ」と訳する向きもあったのである。しかしながら、やはり、「こつ」は 'art' や 'ars' に比べて文字通りはるかに身体に即した働きや内容を示すのではないか。

「こつ」には「こつが分かる」とあるように分析的知を含んではいる。けれども、「こつ」は他方では表層を突き抜けて身に刺さり、骨をもうかがうものではないか。「こつ」は身につけるものにして、身そのものとなるのではないか。この意味では、「こつ」は、'art' ではなく 'knack' や 'tact' に通うものとなろう。

II．構　　造

「こつ」は働きの仕方、方法でもある。だが、この方法は分析的知からはほど遠い。分析的知と

は因果関係の抽出、論証、推論、一般化などを行うことを指す。この分析的知の方法は客観化されうるので、伝達・学習されうるであろう。これに対して、こつは方法であるとしても特殊な方法であろう。

「こつ」は個別的かつ身体的次元にある。それは、私は見る、分かる、知るという表現に見られるような、主語—述語の命題形式における主語の優位さを表明しない。つまり、この命題では、つねに「私 (Ich)」が中心なのである。一方、「こつ」は対象に即している。「こつ」は知より身であって、対象に「さわり」「ふれる」といった体性感覚に組するであろう。知が主格の優位において対象に作用する志向性であるのに対して、「こつ」は対象に近接し、相互に交流する様態ないし共存性であろう。

「こつ」は身のふれ、いわば触身である。つまり、「こつ」は知るではなく触れるに近い。坂部恵が説いていたことであるが、知ると触れるとは対峙している働きである。[9] 知るは見知る、聞き知るといった合成語が成立するように、見るや聞くと同一のラインにある。けれども知るは触れるとは結びつかないのだ。触れ知るとはいかなることか。実は触れるは対象からの応答を待ち、対象において学ぶのである。ここには、「われ考える」「われ知る」というような主格の作用はない。

われわれは機械を修理しているとき、木を切り釘を打っているとき、思いもかけずうまく行くときがある。これは今までどれほど考えても、試みても出来なかったことであった。それは、あたかも、試行錯誤のあげく突然生起する直観的行為のようにも見える。しかし、むしろ、ここでは私と対象との相互の出会いが生起しているのではないか。「こつ」とはそのような出会いへ至る糸口ではないか。直観とは直に観ることであり、その意味では主—客の構造を前提としているのであるが、触身はその構造を越えるのであって、「こつ」はそのような地平に成立するものであろう。

「こつ」は、「私が語る」ことによって他に伝達されうるものではない。こつは言語の処方を受けない。「こつ」は情報ないし記号化を拒む。ということは、「こつ」は第三人称として、つまり客観的な知識として伝えられることができないということになる。したがって、「こつ」は合理的かつ明晰な知のレベルには存しない。

現代の世界は機械技術連関をその構造としている。あらゆる出来事が機械技術の操作によって進行する。それゆえ、「こつ」が介入する余地は極めて乏しい。なぜなら、機械技術連関は視覚と明晰な理知とを要求する。身をもってふれるという身と対象との関係性はそこでは生まれ難い。あるのは、ふれるのではなく「さわる」という視覚に従属した対象作用性である。われわれは身としての手でふれるのではなく、手段としての手で「さわる」のである。手は運動機能にしかすぎぬ。たとえばハンドルにさわる手、つまみにさわる手など。

こうして、オートマチック社会では「こつ」は不要となる。「こつ」という言葉は亡び往く言葉であろう。機器類は古くなれば取り替えるものである。修理ではなく取り代えるのだ。これに対して、「こつ」は古くなって修理を必要とする機器、しかも使用者の使用の仕方によって変容し、その機器独自の癖、個別性をもつようになった機器において生きるのである。その点で、こつは規格からはずれたものに対する方法である。この機器には「くせ」がある。それゆえ、この機器を使うには「こつ」が要るというのだ。したがって、「こつ」は、この機器になじみ、熟練を経た者によって得られ、それによって機器は初めて生きることになる。たとえば、射撃はライフルに身を入れ、その特質にふれ、その微妙な「くせ」を習熟することにおいて成功するのである。かくして、「こつ」は頭脳に記号として覚えこむのではなく人間のトータルな身体性に依拠することがわかる。

III. 教育的状況

生産において「こつ」が不要とされる時代が到来している。生産は記号によって行われる。

オートマチック社会とは記号による生産の社会である。しかも、これは人間の全生活に浸透し、身体性を弱め、抽象化を進める。このことはこどもの遊びを取っても明瞭である。こどもの遊びは視覚と手の運動とに集中している。テレビ、ファミコンゲーム、プラモデルなどはその一例であろう。

「こつ」は身体・道具・対象が関係するところに生まれるのであって、特殊感覚である視覚・機械・対象のラインでは影をひそめて行くものであろう。それでは、「こつ」は人間の社会で消滅するのか。おそらく、「こつ」は、生産の領域では消えるとしても、人間の生活の中では生きつづけるであろう。

生産力の増大は、現実には問題があるとしても、可能性としては、自由な余暇を産出するはずである。余暇は、時間・空間の短縮を目的とする生産に対して、独自の時間・空間の生成を期待させる。それは生の充実に寄与するのだ。

実は、生の充実ということに照準をおくならば、オートマチック社会は本質的に限界をもつ。この社会は願望・目的が即時に達成できるように仕組まれた社会である。ところが願望の即時の達成は願望の満足度を低めるのみならず、願望の内容を次第に貧困にし、生の充足を難しくする。これは願望充足のパラドックスというべきものである。人間の願望の充足は目的へ向かう歩み、そのプロセスの豊かさによって充足されるのである。豊かさとは、目的へ至るための立案・計画、そのための熟練、努力や工夫、忍耐、そして何よりもプロセスを愉しむという人間らしい営為などが含まれていることである。それゆえ、人は、一方ではオートマチック社会を欲求しながら、他方ではそれと異質の時間・空間に生きることを希求する。

オートマチック社会が生む余暇はこうした独自の活動を可能にするであろう。そして、「こつ」はこのような独自の活動のなかで現れるのであり、生の充実に関わって人間の形成を促進するであろう。したがって、「こつ」はこどもの教育においても意義をもつ。たとえば、清掃の「こつ」がある。ほうきを使うこどもはただほうきを動かすだけではなく、身を入れて動かさねばならない。身を入れて特定のほうきの特質にふれたとき、ほうきは身体の統御力の中に加わり、ほうきを使う「こつ」が育つのである。石を割る者は石に身を入れ、石の特質にふれることによって石を割る「こつ」を身につけるであろう。弓を射る者は弓と矢に身を入れその特質にふれねばならない。スポーツの多くはこのような「こつ」をとりわけ要するのである。

ところで、「こつ」はひとつの方法であるとしても個別的かつ特殊な方法である。こつはひとりひとりが発見し、身につけた方法である。「こつ」は一般化された方法ではないということである。したがって、知識のように客観化された記号によって多数の人びとに伝達し、理解してもらうことができない。

すると、「こつ」は教育の対象にはならず、それゆえ教育不可能なものであるのか。しかし、ことばで伝達することのできるものだけが教育の対象であるとはいえまい。芸術や道徳は状況的かつ個別的であるが、実践的行為いわば非言語的な活動によって教えることができるであろう。それゆえ、「こつ」が不特定多数の人びとに同一の方法で教えることができないとしても教育の領域にとどまりうるであろう。

とはいえ、まだ疑念は残る。はたして、「こつ」を会得することが人間の形成に拡がるのであろうか。「こつ」は身体性であった。それゆえ、「こつ」は身体的統御能力、器用さともいえる。これらの能力は人間の形成に関わるのであろうか。人間の形成とは生きることを学ぶこと、学ぶということを学ぶことであろう。形成とはひとつの型へとつくられることではなく、たえず学びつづけることなのである。こつは、このような広い意味での学びへ連なるであろうか。

ところで、凧をつくる「こつ」を覚えたこどもが竹トンボをつくることにおいても同様のこつを身につけうるものであろうか。すなわちある活動における「こつ」は他の活動へ展開するであろうか。これは「こつ」の転移可能性の問

題として検討されねばならない。

「こつ」はたんなる訓練によって獲得されはしない。機械的かつ単純な訓練の中にこつが介入する余地はない。訓練は他の活動への広がりを閉ざす。こどもがひとつの曲を機械的にひくことができるということは他の曲をもひくことができるということを意味しない。機械的訓練は真の意味でピアノをひくということを閉ざしてしまう。これに対して、「こつ」は学ぶ者の対象に対する思い入れないし自然な取り組みから生まれる。そこには試行錯誤や思索も伴う。こうして会得された「こつ」は機械的訓練よりも転移可能性を有しているであろう。

しかしながら、「こつ」はやはり身体性であり、ある対象への関わりの在り方である。したがって、「こつ」は対象に密着するのであって、「こつ」の広がりは対象によって限定される。それゆえ、ソロバンの技能がピアノをひく能力に転移することはないし、テニスの技能が卓球の技能を支えることもない。むしろ、テニスをやっているために、かえって、卓球の上達が妨げられるということになる。ましてやソロバンの技能が数学理論の理解を促すことなどはない。かくして、転移可能性という観点から見れば、「こつ」の会得には教育的意味が乏しいといえる。

Reboul はかつて学習の転移可能性が教育の恣意性を克服すると見た。[10] Reboul によると能力とは転移可能性を成分とするものであり、結局、それは判断力と称された。たとえば、Reboul は、「何かある言葉の意味についてたずねる」と「何かある言葉の意味について調べる」「ある定理を知っている」と「問題を解くことができる」、「フランスの県の名前を暗誦できる」と「地図を作成できる」、「タイプをうつことができる」と「ピアノで曲を演奏することができる」などとを対比して、後者の方が転移可能性が高いので能力の育成を促進するという。この点からいえば、やはり、「こつ」は、それが判断力であり、能力のひとつではあるにせよ、その広がりは大きくはない。

ソロバンを再び例にとると、ソロバンを愛用して、それで計算をするのはひとつの技術であり、それには手さばきの「こつ」をも含んでいるであろう。そして、一般の人びとの計算能力はソロバンの技能に太刀打ちできるものではない。しかし、難しい問題になるとそうとはかぎらないのである。Feynman が語っていたことであるが、[11] 3乗根であればどうであろう。たとえば1729.03。これをソロバンで解くことは容易ではない。もし、1フィートは12インチ、したがって1立方フィートは1728立方インチであるということを知っているとする。そうであれば答えは12よりやや多い数ということになる。1729.03と1728との差は1.03である。この差1.03は百分率でいえば1/1728程度であり、これは1/2000としてもよい。さらに微積分で数が小さい場合、3乗根の超過分は数の超過分の1/3であるので、1/2000を3で割って12倍する。つまり4倍すれば、0.002が出る。それゆえ、1729.03の3乗根の近似値12.002を得ることができる。

以上のことは数学の理論を理解している場合に可能なことであって、理論を理解しているということが広い転移可能性をもつということを示している。

Reboul のいう能力とはこのようなものであるとすれば、ソロバンという道具を使う際の技能ないしそこに含まれる「こつ」は狭い能力という外はない。「こつ」は狭い、応用が利かないというべきか。

「こつ」は知的理解ではなく身体的会得に近い。Reboul のように学ぶことの基本を理解と規定し、学習の意味内容の豊さを他の学習への転移可能性とするならば、「こつ」は遠くへ追放されてしかるべきであろう。

「こつ」は知的拡がりではなく身体的深まりなのである。それは対象に身を入れる全体的活動において生まれ出るものである。したがって活動及びその過程そのものが独自の意義を有しているはずである。

こどもがコマを回そうとしている。もう何回も失敗をしているが、あるとき思いもかけずコマが回ったとする。こどもは歓喜し、さらにそ

の状態を再現しようとする。やがて、こどもはコマを回す「こつ」ないし調子に気づきそれを学びやがて自由にコマを回すことになる。その試みの中で、こどもはコマに身を入れ、それにふれ、出会い、コマに愛着を抱き、愛する友だちとなるのだ。「こつ」はここでは出会いのきっかけである。それゆえ、ここで得られた「こつ」が他のすべてのコマに活用できるわけではない。とはいっても、こどもは身をもってコマにふれ、コマとの出会いを成就したのであり、その喜びは無上のものとなるであろう。このような経験は人間が生きるということにとって、したがって、人間の教育にとって無意味であろうはずがない。

Ⅳ 根源的力

「こつ」は能力すなわち判断力であるとしても全く異質の判断力であろう。弓を用いて的を射る「こつ」。陶芸におけるロクロを用いる「こつ」。これらはいずれも身体において会得する「こつ」、直截的な体得、業であろう。これは身体性へと深化した判断力、心身にしみこみ同化した能力といえよう。

それゆえ、「こつ」は対象に親和した状況的実践的能力である。たとえば、生きる「こつ」について人は語る。人の生は豊かな未来があるとはいえ、意志や計画どおりに行くことはない。人の生は不確実性にみちているのだ。そこではつねに情況に即応した判断が求められる。この判断は精緻な分析や論理の貫徹を受け入れるとしてもなおそれを越えた判断である。であれば、「こつ」はやはりひとりの人間が身を尽くして学ぶときに培われるその人自身の力なのである。それは一般的な判断力を越えた、本質的にそれとは異なる、それの根源にある力である。したがって、「こつ」を、たんに他への転移可能性ないし応用力でもって評価することは誤りである。「こつ」はそれらの根源になってそれを支えるものへ関わっている。「こつ」は具体的な対象にふれ、出会い、そこに生きることと通じている。それはより感性的かつ統合的である。それゆえ、こつは根源的ロゴスへ行きあたるであろう。

それでは「こつ」はいかにして教育可能であろうか。否、「こつ」は会得されるものであり、試みの過程において生まれ育つものであるので、直接の教育を拒むのである。にも拘らず教育は学ぼうとする者を助け成らしめることができる。行きづまった学習者への機微をついた指摘が糸口をきづかせ「こつ」を会得させることがある。また、ひとつの情況に学習者を立たしめることによって彼がアポリアに気づき、それを抜け出ようと努力するのを待つこともできる。こう見ると「こつ」は芸術の教育に立ち入っているものである。

哲学者 Herrigel が日本で弓を学んだとき、師範は的を射ようとする意志を捨てるように求めたという。[12] この矛盾の解決は根源的ロゴスによって会得されるのであった。それは知や意志ではなく自己と弓矢と的との渾然たる一体化、出会いであった。また、楽焼のある陶匠は土を手でこねるとき何を創るかを意志しないと語ったことがある。彼は土をこねている間に土と手とのふれ合いの中で自然にまとまった型ができ上がってくるのだという。「こつ」はこのような人と物とのふれ、身をもって会得する、意識を越えた、それゆえ言語の制約を越えた活動によって萌芽するのであろう。

むすびにかえて

「こつ」を検討するうちに、人間の根本的な層にまで立ち入ってしまった。そのため、「こつ」の概念が拡大してしまうということにもなった。これは検討の成果でもあり、他方では問題点でもある。検討を踏まえて付言するならば、こつは文字通りわが国の文化に根ざしたものであって、しかも、'art' や knack などよりはるかに根源的な意味を有しているように思われる。

注

1) Whitehead, A. N. The Aims of Education. Williams & Norgate Limited,London,1929, P. 81.

2) Whitehead. ibid. P. 82

3）『ホワイトヘッド教育論』久保田信之訳，法政大学出版局，1972. P. 80.
『ホワイトヘッドの教育目的』元野義勝訳，教育書林，1955.P.98
4）白川静『字統』平凡社，PP. 783－786.
5）『教育の目標』杉本正二，万流社，1981. PP. 99 －100.
6）諸橋轍次 『大漢和辞典』大修館書店，昭和34．PP. 569－570.（巻12）
7）小西甚一『基本古語辞典』大修館書店，昭和41．P.175.
8）小西甚一編『世阿弥集』筑摩書房，1970. PP.147－149.
9）坂部恵『「ふれる」ことの哲学』岩波書店，1983. PP.21－36.
10）Reboul, O, Qu'est-ce qu'apprendre? 1980. 石堂常世訳『学ぶとは何か』勁草書房，1984. P．279.
11）Feynman, Surely You're Joking. 1985. 大貫昌子訳『ご冗談でしょう、ファインマンさん』岩波書店，1986. PP.12－13.
12）Herrigel, E. Zen in der Kunst des Bogenschiessens, 1948. 稲富栄次郎，上田武訳『弓と弾』福村出版，1986. 参照．